
白夜叉再臨篇～記憶無き鬼～

愛華蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白夜叉再臨篇〜記憶無き鬼〜

【Nコード】

N4739U

【作者名】

愛華蝶

【あらすじ】

幕府特別武装警察、真選組が入手したのは、過激派攘夷志士、高杉晋助が江戸に現れたという情報だった。

高杉逮捕に池田屋に向かった土方と沖田が見たものは…

序章（前書き）

こんにちは！！初投稿です！この小説は某動画投稿サイトの場面も一部含まれていたり、銀魂本編の偽最終回の場面も一部含まれています。

まあ生暖かい目でみてやって頂けたら幸いです…

序章

闇…それは先の見えない絶望

光…それは明るく照らされる希望

光が濃い程、闇も深くなる…

決して交わることのない、闇と光

黒と銀、

決して交わることのない、二つの魂…

闇は光をも呑み込む

しかし、闇の中でも光は道標となる

黒も、全てを塗り潰す…

しかし、黒に塗り潰されれば、元の色に戻ることは出来ない…

全ての色の根元は黒…どんなに綺麗な色も、他の色と混ぜていけば、やがて黒になる…

絶望は、希望を打ち砕く…

これは、黒と銀が…交わることのない魂が絡み合う話…

序章（後書き）

次から本編に入ります。お楽しみに

第1章 明日の朝ご飯は昼間に多めに買っておけ（前書き）

序盤、銀ちゃんが大人気ないです。
汚い文章ですいません…

第1章 明日の朝ご飯は昼間に多めに買っておけ

夜の大江戸歌舞伎町。人気も少ない夜道を歩く独りの男：

「ったくよオ。何が悲しくてこんな真夜中にコンビニなんかに行かなきゃならねーんだよ」

万事屋銀ちゃんこと、坂田銀時。彼がぶつくさ言っている理由は遡ること1時間前。

「銀ちゃん銀ちゃん、腹減ったアルウ」

まるで子猫のように銀時にすがりつくのは、怪力チャイナ娘の神楽である。

「何か食べないと私は今日は眠れないネ」

「夜食は美容の天敵だぞ」神楽。太りたくなけりゃさっさとその口を封じて寝ろ」

ジャンプを読みながら辛辣な言葉をかける銀時に、呆れながら声をかけたのは銀魂ツッコミ担当、志村新八である。

「でも銀さん、今冷蔵庫の中カラッポですから、明日の朝ご飯買ってこないと…」

「じゃあ新八、オメーちよっとそのコンビニ行ってこいや」

「嫌ですよ！僕まだ掃除終わってませんから！」

ここで神楽が口を出す

「じゃあここは一つ、ジャンケンで決めるネ」

「上等だコノヤロー」

で、銀時が負けた、ということだった。

「あのガキ絶対後出ししやがった。ぜってーそうだ！帰ったらあの頭のボンボンむしり取ってやる」

何とも大人気ない発言である。

しかし、銀時は気付いていた。

後ろから音も立てずに近付く影の存在に…。

第1章 明日の朝ご飯は昼間に多めに買っておけ（後書き）

次話、一気にシリアスになります。皆様の御期待に添えられればいいのですが…

第2章 外出する時は防犯ブザーを持って行け（前書き）

てすとしてなーに？おいしいもの？

試験週間なんて知りません。続きをどうぞ！

第2章 外出する時は防犯ブザーを持って行け

「…誰だ？」

ふと足を止め、自分のうしろに声を投げかける。

「隠れてねえで出て来たらどうなんだ？」

と……

「……ッ……！？」

いきなり『影』が銀時に襲いかかって来た。すかさず木刀で…

ガアアアアアン！！

激しい衝撃を物語るような音の後、近くを流れる川に落ちたのは…
……銀時の木刀だった。

そして、暗闇から滲み出るように現れたのは…

「ッ…テメエ…」

「よォ銀時。久しぶりだなァ」

地に響くかのような、それでいて、紫色の着物に飛び交う蝶のように軽やかな声、着物と同じ紫色の髪が月の光を受けて不気味に光る。そしてその前髪から覗く獣のような左目と、幾重にも包帯に巻かれた右目。

間違いねえ…コイツは…

「高杉……！」

第2章 外出する時は防犯ブザーを持って行け（後書き）

ちよつと短かったですね…。次回頑張ります！

第3章 困った時はとりあえず誰かのせいにしとけ（前書き）

すいません高杉さんの包帯の位置逆でした！今回高杉さんキャラ崩壊。ご注意ください！

第3章 困った時はとりあえず誰かのせいにしとけ

高杉…紅桜の一件で、一度目を合わせたきり合っていない。いや…あの日……

『全力で、テメエをぶった斬る!!』

……にしても何か違和感

「…高杉イ、お前包帯の位置逆じゃね？」

第2章で確かに高杉の包帯の位置は右になっている。

「これは俺のせいじゃねエ。作者の愛華蝶のせいだ」

「いや作者の名前フツーに出してんじゃねーよ!!」

「それによく見ろ、コレ、ぶっちゃけ左じゃね？」

「どっからどう考えても右だろうが!!」

「いやいや、テメエは偽の文章に惑わされてるだけだ。文字では右となっているから読者は俺が右に包帯をしているという先入観に捕らわれているんだ。怖エな小説って」「いや俺は今のお前が一番怖エよ!何だその本編では決して見せねえポケ率の高さは!!」

結局高杉の包帯はいつも通り左と言うことで話は終結した。

で、こっから本題。

「侍の命とも言える刀を奪われるとは…銀時、テメエ弱くなったな」

「高杉…テメエ何しに来た」

「何しに来た…か。」

クククッ…高杉の笑い声が不気味に響く。

「お前、あの日言ってたよなア。『俺はこの国を絶対許さねえ』って。なのに今じゃ幕府の狗に味方するとはな…」

「……何が言いてえ……」

「黒い奴と白い奴……さア、」

「どっちが強い？」

第3章 困った時はとりあえず誰かのせいにしとけ（後書き）

次回、真選組と桂さん出ます！お楽しみに！

第4章 落とし物は交番へ（前書き）

ちよつと長いかな…

では本文をどうぞ！

第4章 落とし物は交番へ

「遅いアル」

机の上に顎を乗せて口を尖らせているのは空腹の子猫…ではなく、神楽

「寄り道でもしてるアルか？」

「まさか…あんなに行くの嫌がってたし」

銀時が出て行ってからもう二時間経っていた。

「銀さん…」

新八は窓の外を見つめてそう呟いた。

グシャツ…

血だまりの中に銀時の身体が崩れ落ちる。

「…もう終わりか？」

高杉が銀色の髪を乱暴に掴み、無理矢理顔を持ち上げる。その顔は血に染まり、苦痛に歪んでいた。

「…う…あ…ッか…すぎ…」

「これが攘夷戦争で恐れられたら白夜叉…か。笑わせやがる」

「…ッ…テメツ…」

「銀時ィ…テメツの中にまだ獣はいるのか？」

「…?…」

「貴様の中の獣…」

「叩き起こしてやるよ」

次の日、朝一に万事屋に来たのは…

「すいませーん。銀時くんいますかー？」

攘夷志士、桂小太郎である。

「いませんよ居留守ですよ」

正々堂々居留守をする神楽。

「ちよっ、神楽ちゃん！ハイハイすぐ行きますー！」

新八が扉を開けると、コンビニの袋と洞爺湖の木刀を持った桂がいた。

「桂さん…その木刀…」

「さっき川で拾ったんだが…銀時はどうした？」

「…昨日の夜から帰って来てないんです」

「何…？」

と、そこへ……

「かーっらああああ!!」

「!?!」

突然の大声。そしてその声の正体は…

「今日こそはとっ捕まえてやる!」

真選組副長、土方十四郎と、真選組一番隊隊長、沖田総悟だった。

「チッ!真選組か!」

そう言うや否や、桂は万事屋の窓から逃げていった。

「なっ!窓から!?!何て奴!」

そう言っつて土方と沖田は万事屋から飛び出して行った。

「……騒々しいな…」

「あーあ、また逃げられましたねイ」

「ツくそっ!」

特に残念そうでもない様子の沖田と、明らかにイライラしている土方。

「仕方ねえ。今日は帰るぞ」

「いいんですかい?」

「今夜どこ行くか聞いてなかったのか?」

「聞いてやしたよ?池田屋に高杉をとっ捕まえに行くんでしょ?」

「そのために今日は作戦会議だ」

その会話を桂は建物の陰から聞いていた。

「高杉が…？」

桂に蘇ってきたのは、あの時の高杉の言葉…。

『俺はただ壊すだけだ。この腐った世界を』

第4章 落とし物は交番へ（後書き）

次回！山崎出ます！めっさグロイかもしれません！

第5章 ご飯は食べ過ぎも駄目だし、食べなさすぎも駄目。ようは限度を知れ

テスト勉強サボってテレビ観てたら母さんが静かに怒ってました…

「あれ…？勉強してないんだ…フーン…」

地味に恐い

第5章 ご飯は食べ過ぎも駄目だし、食べなさすぎも駄目。ようは限度を知れ

午後九時。

月光が真選組の黒い隊服を照らす。

池田屋の前に集まったのは十数名の真選組の隊員達。その全員が緊迫した表情をしていた。

「よし、今から一番隊、二番隊が踏み込む。…どうした？ 沖田」
なぜか沖田は俯いている。

「…お腹が空いて動けません」

「いやテメーさっきまで何か食ったよな！！ 動きたくねえだけだろーが！！ 大体腹が減って動けねえって言うのは立てねえ位になつてから…」

と、沖田はその場に座り込んで、

「お腹が空いて動けません」

「座り込むなあああ！！」

呆れた奴である。

「仕方ねえ…山崎、お前行け」

「えっ！？ 俺ですか！？」

いきなり名前を呼ばれて驚く真選組監察の山崎退。

「一人でも多い方がいいだろ。何かあったらすぐ呼べ」

（だったら自分が行けばいいんじゃない？）

と、思った山崎だが、勿論そんな事口が裂けても言えやしない。

「この部屋だ…」

一人の隊士が襖に手をかける。そして、バンツと音を立てて開け放つ。

「ご用改めである！！真選組だあ！！」

部屋の中にいた人物を見て、山崎は目を見開いた。

「：！！あんたは：ッ」

「うわああああ！！」

突然の断末魔。すかさず土方が反応する。

「例の部屋だ！沖田…は駄目か」

「行きやしょう土方さん」

「オメー腹は？」

若干沖田に苛立ちを見せながら、土方は例の部屋の前に立つ。

「山崎！無事か？返事をしろ！」

襖を叩いて叫ぶと、山崎が、

「副長来ちゃ駄目です！！早く逃げ…」

ブ
シ
ャ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ッ

山崎の声は、血肉の弾ける音で遮られた。

第5章 ご飯は食べ過ぎも駄目だし、食べなさすぎも駄目。ようは限度を知れ

愛華蝶「テストめんどいよ」

（駄々をこねる）

桂「コラ！勉強をせねば銀時のような大人になるぞ！俺が教えてやるから！」

桂さん！！勉強教えてエ！！

第6章 人の顔と名前忘れるって大分失礼（前書き）

愛華蝶 「突然なんですが、近いうちにオリキャラ出そうと思います」

銀時 「またどうせくだらねーやつが入って来るんだろ？」

桂 「必要ないと思うがな」

愛華蝶 「あらら〜？桂さんの仲間設定なんだけどな〜」

桂 「何!？」

第6章 人の顔と名前忘れるって大分失礼

「…山崎…?」

部屋の中が静かになった…土方の背中を冷や汗が流れる。

「…ッ!!」

たまらず襖を開け、中に入る。

そこにいたのは、土方がよく知る人物だった。

「……万事…屋…?」

白銀の天然パーマにどこか気だるそうな顔…坂田銀時だった。すぐそばの窓枠に座っているのは、包帯を巻いた男、高杉だ。

そして銀時の手に握られているのは、血の滴る…刀。

「まさか…旦那が…」

沖田は銀時や自分達の足元に横たわる真選組の隊士達を見て呟いた。

「この人数を…一人で? いやあ、見直しましたぜイ旦那」

「いや問題そこじゃねーだろ」

感心する沖田にツツコミを入れつつ、土方は高杉に向き直る。

「…高杉。テメェ万事屋…銀時に何吹き込んだ」

「吹き込む?」

ククッと笑い、煙管の煙を吐き出す。

「人聞きの悪い事言うなよ。俺ア奴に真実を伝えたまでだ」
「真実だあ？」

納得のいかない表情で銀時を見つめる。

「オイ天パ！テメー何で高杉なんか協力してやがる！！」

チラリと視線だけ動かして土方を見る。

「…お前ら…誰？」

「……え…？」

思いがけない言葉に土方は動揺する。

「な…何を…言ってるんでイ…旦那」

「高杉。こいつらも幕府の狗か？」

「あア。しかも、今の奴らより格別に強い、幹部クラスの奴らだ」

「ヘエ…だったらさっきより楽しめそうだ…」

不気味な笑みを浮かべて笑う銀時は、いつもの銀時ではなかった。

「でも、まだコイツ生きてるから…コイツから殺っちゃおうか…」

銀時は左手に持っていた獲物を床に放り投げた。その獲物に一気に刀を振り下ろす。

「山崎イイイイ!!」

ドオオオオオン!!

その時、爆破が起きた。

第6章 人の顔と名前忘れるって大分失礼（後書き）

ってことで、オリキャラ出します次話あたりかな…？お楽しみに

第7章 助けてもらったらとりあえずありがとう（前書き）

愛華蝶 「青の祓魔師に陸奥さんの声優さんが出てたね」

陸奥 「頭には内緒で副業しちよるぜよ」

愛華蝶 「そんなに貿易の仕事って儲からないの？」

第7章 助けてもらったととりあえずありがとう

目を開けると、そこには見覚えのある眼鏡をかけた少年がいた。

「土方さん！」

志村新八である。いつの間にか土方は万事屋にいたのだ。窓の外を見ると、日は昇り、朝日が射し込んでいる。

「ここは…俺達、確か池田屋で…」

どうしても爆破の後からの記憶が出てこない。

「目を覚ましたか」

「…！お前は…！！」

隣の部屋から顔を出して来たのは長髪の男、桂だった。そしてその後ろから眼帯をつけた、男がついて来る。長髪を後ろに束ねている。

「桂…テメエ何でこんな所に…」

「土方さん、桂さんは土方さんたちを助けてくれたんです」

「はあ？」

意味が分からないという顔をする土方に、「仕方あるまい」と眼帯まえばらいっしの男…前原一志が呟く。

「ずっと気を失っていたからな。しかし土方。貴様まさか命の恩人に手錠をかけるといふようなバカな真似はせんだろうな？」

あざ笑うかのように言う前原の言葉に、手錠を構えていた土方は固まってしまう。

「ところで、」と口を挟んできたのは沖田である。

「何で旦那はあんな風に俺に襲いかかってきたんでさア。まるで俺らの事を知らねーみたいにな」

「…聞きたいか？」

桂が聞くと土方と沖田は静かに頷いた。

「なら…心して聞けよ」

第8章 嫌な思い出なんて鬱陶しいからずるずる引きずるな（前書き）

?? 「早く出番ほしーなあ」

愛華蝶 「まだ名前決まってるから出せないよ」

?? 「名前募集中です！」

第8章 嫌な思い出なんて鬱陶しいからずるずる引きずるな

「あれは、俺や一志、高杉が松陽先生の下で剣術を学んでいた頃だ」

松陽先生は、とても優しい人で、塾生にもよく慕われていた。…あの高杉でさえも。

ある日、先生は一人の子供を連れて帰ってきた。

「子供…ですか？」

新八が不思議そうに聞いてくる。

「ああ。戦場でひとりぼっちだったその子供の名前は…」

「坂田銀時」

その名前を聞き、新八と神楽が素早く反応する。

「ぎっ…銀さんが!？」

「何で銀ちゃんが…」

「おそらく、両親に捨てられたか、あるいは戦で両親を殺されたか

…」

「いずれにせよ」と言ったのは前原である。

「戦場でさまよい歩いていた銀時は、自分が生き延びるためにと屍の身包みを剥いで生きていたんだろう」

「…銀さん…」

新八は何だか普段のあの気だるさからは想像もできない銀時の過去に言い知れない寂しさを感じた。

「銀時も塾で一緒に学び始めて数ヶ月が経ったある日、先生が天人の手によって…殺された」

「…!!」

新八は、声が出なかった。何で…

「攘夷…か」

沈黙の中で口を開いたのは土方だった。

「その頃はもう攘夷と叫ばれていたが、幕府は天人の力を恐れて攘夷派を弾圧しようと考えていた」

「だから、幕府は一部の天人と手を組んで、まだ少数派の攘夷浪士たちを殺したんだ。幕府が本格的に天人と手を組んだのはもっと後になってからだったが」

土方と前原の会話は何だか重苦しかった。

「先生が亡くなった後、すぐに幕府の人間が来て、塾を焼き払った。

その時、銀時は『俺はこの国を絶対に許さない』と言っていたんだ。おそらく、その時の記憶で、復讐に駆られる鬼となった…」

「その鬼を叩き起こしたのが…高杉」

「何とか元に戻す方法はないアルか!？」

神楽が泣きながら聞いてくるが、それに答える者は誰もいなかった。

第8章 嫌な思い出なんて鬱陶しいからずるずる引きずるな（後書き）

前書きでありましたが、新オリキャラの名前を募集中です。詳しくは愛華蝶の活動報告3日目をご覧ください

第9章 気になる事は早いうちに聞いとけ（前書き）

??? 「出番欲しいよおー（泣）」

前原 「かわいそうだな（失笑）」

??? 「お前に言われたかないやい!!」

愛華蝶 「コラコラ、ケンカすんなや。お前ら仲間なのに」

第9章 気になる事は早いうちに聞いとけ

その頃、鬼兵隊の船

「……………」

窓辺で頬杖をついているのは、白髪の天然パーマ、坂田銀時。

「……………」

その坂田銀時を遠目で見ているのは、河上万斉と来島また子だった。

「…万斉先輩。何で晋助様はこんな所に坂田銀時を連れてきたんスカ!？」

「さあ…晋助がやることは見当がつかんでござる」

焦り気味の来島に対して平気な顔で三味線を轆く万斉。

「さあって…」

「ま、晋助にも何か考えがあるのでござろう。それに口出しするのは野暮と言うものでござる」

と言いつつも、万斉も少し不安があった。

『全力で、テメエをぶった斬る!』

(あの言葉が本当ならば、今にでも襲いかかって斬り捨てているはず…しかしあいつの態度からは襲うという気配は感じられん)

「一体何故…」

「ぐほっ！」

大量の血が手を汚す。微かに唇についた血を手の甲で拭う。

「…あと少し…あと少しだからっ…」

もう少し保ってくれ…

肩で息をしながら、そう願うのだった…。

第9章 気になる事は早いうちに聞いとけ（後書き）

あの血を吐いてたのは誰でしょうね。

分かった人もいるかもしれませんが…（焦）

??? 「名前募集中ー！」

第10章 猫の取り扱いにはご注意(前書き)

??? 「やっと名前決まったー!」

愛華蝶 「ご協力してくれたのは、影夜叉さんです。ありがとうございます!」

??? 「じゃあ本文をどうぞ!」

第10章 猫の取り扱いにはご注意

「とりあえず、高杉の足取りを掴むしかねえな」

煙草に火をつけて土方が呟く。

「でも、そんなのどうやって…」

「それなら俺に任せろ！」

突然新八の言葉を遮って現れたのは、首に大きな鈴をつけた10代くらいの女の子だった。

「優羅^{ゆら}じゃないか！どうしたんだ？」

「どうしたんだ？じゃないだろ！いちと小太郎がエリーと俺をおいでどっか行っちゃうから探してたんだぞ」

年に似合わず偉そうな口調である。

「悪かったな。まだ寝てたから、起こしたら悪いと思って…」

「今度置いてったら、カツオのたたき奢ってもらうからな！！」
偉そうなわりに発想は猫である。

「で、さっき言ってた『俺に任せろ』ってどういう意味でさア」

沖田が聞くと、猫娘…じゃなくて、優羅は「そうだった」と前原に向き直った。

「俺、高杉の足取りを知ってる奴を知ってるんだ」
「誰なんだ？ソイツは」

「鬼兵隊と明日取引か何かをする貿易船があるんだ。しかも、それはいちや小太郎がよく知ってる奴だ」

「…まさか」

顔を見合わせた二人を見て、優羅はその貿易船の持ち主の名前を言った。

「坂本辰馬だ！」

第10章 猫の取り扱いにはご注意（後書き）

優羅^{ゆら}

年は10代くらいの子。首に大きな鈴をつけてる。…あとの詳しいことは愛華蝶の活動報告3日目を…

第11章 馬鹿は死なないと治らない（前書き）

前原「今回遅かったな」

愛華蝶「テストの補習と部活で…」

桂「補習？何に引かなかったんだ」

愛華蝶「追試は数学と理科。提出物はオーラルと地理」

優羅「頭悪いな。部活は？」

愛華蝶「放送部と演劇部です」

全員「まさかの掛け持ち！？」

第11章 馬鹿は死なないと治らない

「よおーヅラ、いちー。元気しちよったかー？」

「ヅラじゃない、桂だ」

もじゃもじゃの天然パーマにサングラス、長身な男が桂と前原に親しげに笑いかける。当の桂は少々鬱陶しげな表情をしているが。

「…こいつが高杉の居場所を知ってるっていう坂本辰馬…か？」

何かイメージと違う…と思いつつも、土方は坂本に話しかける。

「テメエが坂本辰馬か。俺は幕府特別武装警察真選組副長、土方十四郎だ。宜しく」

「あー、堅苦しいのはニガテじゃきいフツーに話すぜよ。わしは快援隊の坂本辰馬じゃ。で、こっちが部下の陸奥じゃ」

坂本の後ろにいた笠を被った女性がお辞儀する。

「で、本題に入るんだが…高杉はどこに？」

土方が聞くと、坂本は今までとは違う真面目な顔になった。

「明日の午後8時、晋助とターミナルで会う約束をしちよるぜよ。何か知らんが話がしたいと言ってきて…」

「午後8時…ターミナル…」

（アイツ…ターミナルで一体何を…）

前原が考えこんでいると、新八と神楽が割り込んでくる。

「僕達も行きます！」

「銀ちゃんを助けるアル！」

土方と桂は少し驚いたようだったが、すかさず優羅が入ってくる。

「当たり前だろ！俺や新八、神楽。みんなで行くぞ！なっ、いち」
「えっ…！あ…ああ…」

いきなり話を振られて曖昧な返事を返してしまう。

「よし！決まりだ！明日はみんなでターミナルに殴り込みだ！」

「いや殴り込みはさすがにマズいでしょ！！」

新八は優羅にツッコんだ。

「おい。ところで山崎はどうした？」

土方の言葉を聞いて沖田は俯いた。

「…山崎は…」

「…ッ…まさか…」

そして、沖田は、

「あそこでミントンしてやすぜ。傷だらけで」

指差した先には、頭に包帯を巻いた山崎がいた。動くのに支障はな

さそうだった。

「……………フツ」

土方は鼻で笑い、そして、

「山崎イイイイイ！！」

万事屋に土方の怒声が響き渡った。

その日の夜、桂は窓から月を見上げていた。

「どうした？小太郎。眠れないのか？」

「一志…。優羅はどうした」

「もう寝てる。おかしいな。猫は夜行性のはずなんだが…」
「そうか…」

優羅に皮肉を言う前原を見て、桂は苦笑した。

「小太郎は…考え事か？」

前原が心配そうに聞いてくる。

「ああ…銀時の事をな…」

桂が思い出していたのは、攘夷戦争の最中、銀時が桂に言った言葉だった。

『美しく最後を飾り付ける暇があるなら、最後まで美しく生きようじゃねーか』

「銀時…」

満月よりも少し欠けた月が夜空に浮かんでいた。

「今のお前は…美しく生きているか…？」

第11章 馬鹿は死なないと治らない（後書き）

愛華蝶 「ちなみに言い忘れてましたが、今回のサブタイトルはRADWIMPSの「おしゃかしやま」の歌詞からとりました」

神楽 「作者はRADWIMPSが好きアルな」

第12章 やっぱ祭りは大勢の方が楽しい（前書き）

新八「あの…今更なんですけど…この話、ストーリー展開早すぎませんか？」

神楽「仕方ないアル。作者の安っぽい脳みそでできた作品アルからな」

愛華蝶「すいませんねえ…（怒）」

第12章 やっぱ祭りは大勢の方が楽しい

次の日。約束の時間通り、ターミナル前に集まった新八、神楽、桂、前原、優羅、土方、沖田、山崎。そして坂本、陸奥。

「…いよいよですね」

新八はゴクリと唾を飲み込んだ。

「それじゃあ、行くぞ」

（銀さん…待っててください…!）

「そろそろか…」

「晋助様？」

「そろそろ客が来る…。それと同時にド派手な祭りが始まるぜ…」

高杉のそばにいるのは、来島、万斉、そして白夜叉…坂田銀時…。

「もうすぐだ…」

高杉の口元に妖しい笑みが浮かぶ…。

「高杉イ!!」

「ッ!!?」

突然の怒声。来島が振り返るとそこにいたのは、土方を先頭にした

集団だった。

「貴様……!!」

「……辰馬ア、俺アテメエに『1人で来い』と言ったはずだぜ？」

銃を抜く来島とは裏腹に、落ち着き払った態度で高杉は問いかけてくる。

「晋助……」

「高杉！貴様が何を考えているのかは知らんが、これ以上犠牲を増やすのはやめろ！！こんな事をして何も変わらない！」

坂本の言葉を遮って前原が高杉に詰め寄る。

「……!!銀さんッ……!!」

高杉の後ろに立つ人物を見て新八と神楽は驚愕する。

「……………」

「銀さんっ！何で高杉なんか……」

「目を覚ますアル銀ちゃん!!」

二人は必死に呼びかけるが、銀時は無反応だ。

「無駄だ。今は何を言っても、お前らのこと覚えてないんだから」

「でもっ、優羅……」

神楽は半分泣きかけている。

「万斉、来島。テメーらはここで奴らの相手してやんな。俺アでけー花火をぶち上げてくらあ。…銀時…テメーもだ」

高杉の言葉に無言で頷き、銀時は真剣を抜き、その刃を新八達に向けた。

「…銀…さんッ…」

光のない目。獲物をとらえたその目はいつもの死んだ魚のような目ではなかった。

（この人は…こんな目をするんだ…）

新八は全身が指先から冷えていく感覚がした。

ジャキッ

銀時に刀が向けられた。その刀を持つのは…

「か…桂さん…」

「貴様がその気なら…俺が相手しよう」

第12章 やっぱ祭りは大勢の方が楽しい（後書き）

さて、次回はどーなる！？桂さんと銀ちゃんがついに激突！！

第13章 大切な物は壊すのは簡単（前書き）

優羅 「なあなあちよつと聞きたいんだけど…」

愛華蝶 「何？」

優羅 「キャラ紹介で好きな食べ物があったけど、何でチョココメントとかつおのたたきなんだ？」

愛華蝶 「それは、自分が好きな食べ物から何かそのキャラに合う食べ物を設定しただけ」

前原 「チョココメントとかつおのたたき好きなんだな…（何かギョツプが…ゴニョゴニョ）」

第13章 大切な物は壊すのは簡単

「クククッ…楽しくなりそうじゃねェか…。ま、せいぜいがんばんな」

高杉はすぐ後ろの階段を上っていき、姿が見えなくなった。

「高杉ッ…!!」

「ここは俺らが行く! テメーは銀時をどうにかしやがれ!!」

すぐ後を追いかけてしようとした桂を止めて、土方、沖田、山崎が階段を駆け上がっていった。

「晋助様の邪魔はさせないっス!」

「どうせ先程の幕府の狗共も晋助にはかなわんでござる。無駄でござるよ」

「おおおおおおお!!」

突然の声。2人が上を見上げると、人が2人自分達に襲いかかってきた。間一髪でかわしたが、自分達が立っていたところに瓦礫が飛び散る。

「お前の相手は私ネ、シミツキパンツ女!!」

「やっとケリがつけられるな。正々堂々、最後まで勝負しようぜ」

傘の銃口を向ける神楽と、怒りのせいか口調が変わっている前原だ

った。

「誰がシミツキパンツッスか!! デタラメ言ってるじゃねーよクソガキ!!」

「面白いでござるな…ぬしの魂のリズム…聞かせてほしいでござる」

「…ッ…!!」

肩から流れる血。飛び散る血痕。桂と銀時はほぼ互角だったが、双方血まみれ、しかも、互角と思われていたが、次第に桂が押されていく。

ガギイイイイイイン!!

間一髪、桂が銀時の刃を目の前で受け止めた。

（あんなの…銀さんじゃない…銀さんじゃ…ッ）

新八は頭をかかえてその光景を見ていた。

「銀さん…銀さんッ…」

「くっ…!」

銀時の持つ刀に徐々に力が込められていく。

「銀時！ 貴様は何のためにこんな事をしている！ 高杉の言いなりになって、力で解決しようとするつもりか！ 貴様はそれでいいのか！
！」

いつもの銀時は違った。自分の美しいと思った生き方をし、護りたいものを護る…そんな銀時は目の前にはいない。

「銀時！」

「…俺は命をかけて幕府…いや、この世界を壊す。それで死んだとしても本望だ」

…ブツン

桂の中で何かが切れた感覚がした。

ガギン！！

刀を弾かれ、銀時が後ろに倒れると、桂がその胸ぐらを掴んで銀時に顔を近づけた。

「美しく最後を飾り付ける暇があるなら最後まで美しく生きろ！！」

「……ッラ……お前……」

「……貴様が、俺に言った言葉だぞ」

『敵の手にかかるより、最後は武士らしく……潔く……腹を斬ろう……』
『……バカ言ってるじゃねーよ……立て』

自分が諦めかけていた時……胸に突き刺さった言葉。あの言葉がなければ、新八や神楽。幾松、エリザベス……桂一派の仲間達とも会えなかったかもしれない……。

「……………」

銀時は……

ザンツ……！！

桂の胸を切り裂いた。

第13章 大切な物は壊すのは簡単（後書き）

桂「銀時…」

銀時「ツラ…（髪長くて戦いづれえだろ）コソッ」

桂「貴様記憶戻ってるだろおおお!!」

嘘です

第14章 でも一度失ったら取り戻しにくい（前書き）

愛華蝶 「高杉さん誕生日おめでとー！」

高杉 「おう…」

来島 「おめでとーッス晋助様！！」

優羅 「今回本文には出て来ないけどな（笑）」

第14章 でも一度失ったら取り戻しにくい

……………。

「桂……さん…」

動かない。大量の血が流れていく。

それを冷ややかな目で見下ろす銀時は、「知らねえな」と呟いた。

「俺はてめえにそんな事をいった覚えはない」

その光景を遠くで万斉と戦いながら見ていた前原は、目を見開いた。

「……ッああああああああ!!」

刀を握り直し、銀時に突っ込んでいき、その刃を交えた。

「デメエ……! よくも……ッ!!」

動かなくなった桂の身体を優羅が抱きかかえる。その黒い着物がみるみるうちに血に染まり、可愛らしい顔には表情は無く、大きな目からは涙が溢れる。

「小太郎……まだ生きてる……息してるもん……。止血すれば、間に合うかもしれない……」

かすれた声で呟くが、桂はもう虫の息だった。

「銀時イ！！目を覚ませよ！！テメーは本当にこんな事を望んでいたのか！？これがテメーが望んでた事なのか！？白夜叉じゃなく、テメーの声を聞かせる坂田銀時！！！！」

涙を流しながら叫ぶ前原を刀で受け流し、銀時は優羅に抱えられた桂に近づく。

「何をする！」

優羅は必死に抵抗しようとするが、桂を抱えているため、思うように動けない。

「どけよ。そいつにとどめさすんだよ」

「桂は殺させない！俺の家族は殺させない！！」

次の瞬間、優羅の身体から血が吹き出した。

「どけつつつてんだろーが。邪魔なんだよ」

「優羅ああああああああ！！」

絶叫する前原の後ろに万斉が音もなく近づく。

「拙者との勝負がまだ終わってないでござるよ」

振り上げた刀をそのまま振り下ろす。

「前原さん後ろ！！」

「いちイイイイ！！」

神楽が駆け寄ろうとするが、来島に足を撃たれる。

「終わりだ」

万斉と来島が同時に言う。

「神楽ちゃん！前原さんーーーーー！」

ズガアアアン！！

響く銃声に思わず新八は目を瞑った。目を開くと、銃を構えた坂本と陸奥がいた。

「頭の真面目な姿見るのはいつ以来かのお」

「あっはっは。そりやどういう事ぜよクソ女」

「坂本さん！一体今までどこに…！」

「ちつくとそこまで」

「そこまでってどこまでですか！？戦いたくないだけでしょ！！」

「わしゃ争いは苦手じゃき」

「…ッ貴様ら！！」

来島が陸奥を睨みつける。

「まだやるか？」

「上等ッス！」

しかし、来島は右手を坂本の銃に撃たれた万斉に止められてしまう。

「優羅！優羅！」

「ッ…かはッ…い…いちイ…」

泣きながら前原を呼ぶ優羅は今にも息絶えそうな様子だった。

ザシユッ！！

「ッうああああ！！」

「いちイ！！」

肩を押さえてうづくまる前原。銀時に肩を刺されたのだ。

「お前もしつけーな。すぐ殺してやるから待ってろよ」

そのまま桂に近づこうとした時…新八が行く手を阻んだ。

「…もうやめてください。これ以上人を傷つけないでください！」

怖い

最初見たときはそう思った。でもこれ以上桂さんや優羅ちゃん、前原さんや神楽ちゃんを傷つけたくはない！

「何も出来ないくせに何言ってるんだよ」

「何も出来ませんよ！確かにそうかも知れない…。でも、これ以上…仲間が傷つくのを見たくないんです！」

その時、銀時の中に何かが流れ込んできた。

『わしゃあもう、仲間が死ぬところは見とうない』

『片腕では荷物など持てまいよ。今から俺がお前の左腕だ』

これは…俺の記憶…？

『裏切るんじゃないぞ』

『だけどここで動かねーと自分が自分じゃなくなるんでい』

『君と俺とじゃ地味の器が違う』

『バカな男』

『妙ちゃんには内緒だぞ』

『ぬし等のために死ぬ命など持ち合わせてはおらん』

『何度電源が切れようとブレーカーがおちようと…この身が滅ばうと忘れない…』

『バーさんがいなくなったら助かったって何にも嬉しくないアル。銀ちゃんがなくなったら生きてたって何にも楽しくないアル!!』

『お登勢さんはあれ位じゃ死なない!! 僕らは死なない!! アンタ

は死なない!! 何故ならアンタが僕達を護ってくれるから!! 何故なら僕達がアンタを護るから!!」

『そいつの使い方を知りたいきゃあ、付いてくるといい。敵を斬るのではない、弱き己を斬るために。己を護るのではない、己の魂を護るために』

「……………銀さん?…」

「新…八…」

そこにいたのは、いつもの坂田銀時だった。

第14章 でも一度失ったら取り戻しにくい（後書き）

愛華蝶 「最後ら辺のみんなのセリフ。アレどの話の誰のセリフか分かったら最強だと思う」

こんなシーンはまた後々でてくるよ！

第15章 護るもの、護られるもの（前書き）

愛華蝶 「お誕生日おめでとう！」

銀時 「え？ 今日って誰かの誕生日だっけ？」

神楽 「知らないアル」

新八 「ちょっとオオオ！！ 僕の誕生日でしょオオオ？」

銀時／神楽 「そうだっけ？」

新八 「何ですか！？ 高杉さんの時は来島さんとかにおめでとうと言ってもらってたのに！」

愛華蝶 「だって新八だし」

第15章 護るもの、護られるもの

「銀さん…記憶が…！」

「心配かけて悪かったな。駄眼鏡」

「だっ…誰が駄眼鏡ですか！」

言いながら新八の目からは涙が溢れて止まらない。

ガッン！！

「イテッ！！」

鈍い音がして、銀時が頭を抑える。その後ろに立っていたのは、肩を押さえた前原だった。

「やっと目え醒ましたかクソ天パ！！」

「いきなり殴る事はないだろ！いちィ」

前原と銀時のやりとりを見て、新八は改めて思った。

（やっと…帰ってきてくれた…いつもの銀さんが…）

「小太郎と優羅は大丈夫か？」

「何とか血は止まったが、危険な状態じゃ」

2人とも意識を失っていた。

「銀時。ここは俺たちに任せて早く高杉の所に…」

「僕達も行きます!!」

新八が叫んだ。また目を離したら、今度こそ銀さんがどこかに行ってしまうかも知れない…。目を離したくない…。それは神楽も同じだった。

「銀ちゃんは絶対に1人にしないアル!」

いつも頭に付けてる髪飾りが来島との戦いのせいで取れている。

「…お前ら…」

銀時はためらったが、必死に言う2人に…

「…分かった。オメーら、絶対俺から離れんなよ」

「はいっ!」

「オウネ!」

3人は高杉が上がっていった階段を上っていった。

「後は任せたぞ…万事屋」

「な…これは…!」

ターミナルの屋上にあるヘリポート。そこは、燃え盛る炎のせいで夜なのに昼間のように明るかった。その炎の中心に立つ人影と、足

元に倒れる3つの影。

「土方さん！沖田さん！山崎さん！」

3人はボロボロになって倒れていた。

立っていた人影がこちらを向く。

「高杉…！」

血まみれで薄笑いを浮かべる高杉。よく見ると左腕がない。

「記憶が戻ったか…」

呟いて笑う高杉は、まさに鬼そのものだった。

「新八…木刀貸せ」

「あっ…はいっ！」

ずっと握りしめていた木刀を銀時に渡す。木刀を受け取った銀時は、そのまま高杉と向き合った。

「…よお銀時。長かった俺とお前の因縁…ここで終いでしょうや」

高杉の目が獣の光を帯びる。

「高杉…テメェ！」

「終わらせてやるよ…お前がずっと見続けてきた…長い悪夢もな」
「ッ…！」

「言っただろ？銀時。俺はただ…壊すだけだ」

そう言うと、高杉は右手に持っていた刀の紐を解き、口で鞘を抜いた。そしてその刀を銀時に向けた。

「…全てを!!」

銀時も木刀を構える。そして…

ザッ!

「はあああああっ!!」

「うおおおおおっ!!」

「銀さああああああん!!!!!!」

二つの刃が同時に振り下ろされた。

第15章 護るもの、護られるもの（後書き）

銀時「もうちょいで終わるってよ。この小説」

神楽「マジでか!!! 次回作は何アルか!!!」

新八「ちょっと神楽ちゃん! まだ気が早いよ!」

愛華蝶「次は攘夷中心かも」

新八「ってもう次回作考えてるんですか!?!」

愛華蝶「そだよ? 夏休みの宿題ほっぽりだして」

全員「やりなさい!!!」

第16章 復讐からは何も生まれない（前書き）

神楽「そういえば、前話の最後のやり取りは、アニメの150話だったアルな」

愛華蝶「そうだよ。私の好きな伝説の偽最終回！」

新八「あれはリメイクだらけでぐだぐだでしたね（笑）」

桂「ところで最後のモザイク：アレ、高杉は一体何になったんだ？」

高杉「……………（カアア）」

愛華蝶「あ、照れてる。恥ずかしかったんだ」

第16章 復讐からは何も生まれない

月が満ちる静かな夜。縁側に座る松陽の膝の上で眠るのは、銀髪天然パーマの小さな男の子。松陽はその頭を撫でながら呟いた。

「銀時…貴方は、これからどんな人生を歩むんでしょうね…」

戦場で1人で生きてきた銀時。つい先日まで人との関わり方が分からなかった。

「たくさん仲間にもまれて、笑顔でいてくれますかね」

ズシュツ…

突然、松陽の後ろから近づいた影が、刀で松陽の体を貫いた。刀から滴る血が、寝ている銀時の頬に落ちる。

「…銀時…」

ぼんやりと目を覚ました銀時は、何が起きているのか分からなかった。

「美しく…生きてく…ださ…い…」

「先生…？」

ポツッ

江戸に雨が降る。ターミナルの火は既に消えていた。銀時の目の前にいるのは、刀を折られた高杉だった。

「…何故だ」

高杉が聞こえないほど小さな声で言った。

「何故お前は分からない…。憎くないのか？先生を奪ったこの国が…！」

「…憎いさ」

「だったら何故…！！」

「憎いけど、先生は何をしたって帰っては来ない。世界を壊したって、先生は喜ばない。…全部、無駄なんだ…」

高杉の気持ちは痛いほど分かる。けど、先生は絶対そんな事望んで

なんかいない。

「もう終わりにしようぜ。高杉」

銀時が高杉に手を伸ばしたその時、

「ゲホッ！」

吐血。高杉が血を吐いたのだ。雨に濡れたコンクリートの上に血が広がる。

「…高杉？」

突然の出来事に、銀時はただ驚くことしか出来なかった。

第16章 復讐からは何も生まれない（後書き）

土方「そういえば、近藤さんは？ 今回の白夜叉篇では全然見てないが…」

沖田「作者が近藤は動かしづらいからって、」

第17章 人生所詮無駄だらけ（前書き）

新八「あの…すみません。僕と神楽ちゃんの登場がないんですけど…」

銀時「大人の話に入ってくんなくて意味じゃね？」

神楽「えー!!! つまんないアル!」

愛華蝶「ゴメンね…」

第17章 人生所詮無駄だらけ

吐血した高杉は、そのまま膝をついた。

「高杉…お前まさか…」

「…医者からは…永くねえって言われてる…」

苦しそうに呟く高杉は、ヨロヨロと立ち上がった。

「…俺だって分かってる…こんな事したって…全部無駄だって…」

「……………」

「でもどうしても許せなかった…！先生はこの国を愛していた…。
なのにこの国は先生を奪った…！！それがどうしても許せなかった
っ…！！！」

銀時はただ黙って高杉の話を聞いていた。高杉は苦しんでいた。全部無駄な事は分かっている。けれど、復讐の衝動は止められず、沢山の人を殺めることで紛らせていた。

本当は気ままに生きたかった。鬼兵隊の仲間だって、違う生き方をしていたかも知れない。違う出会いをしていたら…。

「晋助様…！！」

突然の声に振り返ると、不安そうな顔の来島と万斉がいた。その後ろには坂本と前原も。

「晋助様っ！口から血が…！！！」

どうやら二人は高杉の病気に気付いていなかったようだ。

「…大したことじゃねえ…」

「晋助…」

「来るな!!」

万斉が高杉に駆け寄ろうとしたが、高杉が大声で止める。

（…もう、終いにしよう…。全て…）

高杉は懷に手を入れて、何かを取り出した。それを見た一同は驚愕した。

高杉が取り出した物は…拳銃。

「…っ高杉…何を!!」

「晋助!!」

前原と坂本が止めに入ろうとするが、万斉と来島に止められた。

「止めんな万斉! 離せ!」

必死にもがくが、自分より身長の高い万斉には適わない。

「拙者は…晋助の意志を尊重したい」

「なっ…!!」

「安心しろ。いち。俺アこの銃で銀時を撃とうなんざ思っちゃいねえよ」

高杉が驚くほど優しい声で言った。そして、ふらつく足取りで銀時

の前まで行くと、銀時に拳銃を握らせて、言った。

「…この拳銃で俺を撃て」

「!?!?!?!?!」

第17章 人生所詮無駄だらけ（後書き）

神楽 「いちって身長いくつアルか？」

前原 「173センチ」

来島 「確かに万斉先輩の方が高いッス」

高杉 「∴その身長俺に分けてくれ∴」

万斉 「え？」

第18章 自殺する人ってある意味世界一勇気がある（前書き）

愛華蝶 「ゴメンね〜今回特にグダグダ。しかも短い」

神楽 「短いのはいつものことアル」

第18章 自殺する人ってある意味世界一勇気がある

「そっ…そんな事出来るワケないだろ!!」

いきなり高杉が拳銃を取り出すという新展開。しかも、それで自分を撃てと言う新展開その2。その場にいる全員、ほとんどがパニック状態である。

「晋助様!! 何を…!!」

「俺は病気なんかで死ぬなんざ嫌なんでね。…どうせなら、今この場で全てを終わらせたい」

高杉は、銀時が握らせた銃を離さないように銀時の手を掴んでいた。

「俺には出来ない。仲間を殺すなんて出来ないっ…」

銀時は謔言のように呟き、拒み続けた。すると高杉がいつもの薄笑いを浮かべた。

「仲間…か。そんな甘っちょろい考えだったからあの時、刀を折るだけで済ませたのか？」

銀時は何も言わずに、ただ俯いていた。

「そんな甘い考えじゃ、世の中生きてけねえよ」

そう言うと、高杉は銀時の腕をグッと自分に引き寄せ、拳銃を胸に当てる。

「頼む：銀時。幕府でも、真選組でもねえ、お前の手で殺してくれ。
：こんな事頼めるのは、お前しかいねえんだ」

「晋助様！！」

「高杉！！やめろ！！」

「：俺には：出来ない：」

俯いたまま、そう言った銀時を見て、高杉は「：そうか」と呟くと、
銀時から銃を取った。

「高杉：」

ホッとした銀時だったが、高杉はそのまま拳銃の銃口を頭につけた。

「お前と、一度一緒に酒を飲みたかったな」

ガン！！

第18章 自殺する人ってある意味世界一勇気がある（後書き）

愛華蝶 「次回最終回です」

新八 「早っ!!」

愛華蝶 「すいません。貧そな脳みそなもんで」

新八 「あっ!! いえ別にそう言う意味では…!!」

第19章 人って暖かい（前書き）

愛華蝶 「あれから半年…心と身体に傷を負った者達は今…」

第19章 人って暖かい

ターミナル襲撃から半年…

「銀ちゃん銀ちゃん」

「銀さんならどこか出かけてったよ」

万事屋にいるのは、新八と神楽だけ。2人とも怪我はすっかり治っていた。

「銀ちゃんまだ少し傷が響くのに、どこ行ったアルか…」

神楽がむくれてソファに寝転がると、新八は思い出したように言った。

「あ！そう言えば、お墓参りに行くって言ってたような…」

それを聞いた神楽は、納得したように顔を上げた。

「…あれから随分経ったアルな」

「うん…」

半年経った今でも、まだターミナルは襲撃の影響で、使用禁止になっている。復興にはまだ時間がかかりそうだ。
そのターミナルを見上げながら道を急ぐ銀時は、病院に向かっていった。

「あっ！銀時！」

「優羅！大分歩けるようになったみてえだな」

頭や首やら、いろんな箇所には包帯を巻いた優羅が駆け寄ってくる。これでもまだ包帯は減った方だ。

「優羅。あんまりはしゃぐと傷口が開くぞ」

「大丈夫だよしぐらい。いちほんっと心配性。俺の心配より、自分の心配しろよ」

優羅は、まだベッドの上にいる前原を見て言う。万斉との戦いの傷、そして銀時にやられた肩の傷が想像以上に深く、治りにくいのだった。

「本当に一志は無茶をするな…。そんな重傷でよく屋上まで上がったものだ」

「いや、あれは辰馬に肩を貸してもらって…」

前原の右隣のベッドには、同じくベッドから動けないでいる桂がいた。桂が一番の重傷だ。

「何だかんだ言いながら、オメー等全員ピンピンしてんじゃねーか。心配して損したわ」

「その言い方はないだろう銀時」

銀時と桂のやりとりを遮って、優羅が銀時に聞く。

「なーなー銀時ィお見舞い品は？」

「必要ねーだろ？そんだけ元気なら」

「ケチィー」

しばらくして病院を後にした銀時は、道端で土方、沖田、山崎の真選組トリオと合った。

「オメー等、傷はもういいのか？」

「ああ。それ程ひどくもなかった」

土方がそう言うと、沖田が申し訳なさそうに俯きながら言った。

「すいやせん、旦那。俺達、あの時何も出来やせんでした…」

「別にお前らは悪くねえよ」

辛そうに目を伏せる銀時に対して、3人は何も言えなかった。

「そいやあ、あの2人どうなった」

あの2人とは、来島と万斉のこと。そのことに関しては、山崎が説明した。

「あの2人は、過激派テロ集団の一味として、処刑されるとのことです」

「そうか…」

当然と言えば当然だが、なんだかいたたまれない気持ちだった。

ガサツ：

すぐその花屋で買ってきた花束を持って、銀時が来たのは、2つの墓石の前。そこに書かれている名前は、『高杉家』と、『吉田家』。先生と高杉の墓だった。

「…久しぶり。先生、高杉」

その前に花束を置くと、銀時は、ゆっくりと話しかけるように言った。

「高杉…先生と、そっちでうまくやってるか？お前昔から先生大好きだったからな…。うまくやってないワケないか…」

すると目線を隣の墓石に移して、同じように語りかける。

「先生…俺、幸せ者だと思う。先生に会えて、沢山の仲間と出会えて…まあ、その仲間がウゼエ奴ばっかだけだよ」

苦笑しながらも、銀時は楽しそうに話す。話しながら銀時は、いろんな仲間の事を思い出していた。

『僕は花のためなら喜んでどん底で土になる』

『私は、自分の戦場は自分で決める。血ではなく、魂^{こゝろ}で』

『惚れた女にや、幸せになってほしいだけだ』

『手エ汚すのは、俺達の役目だ』

『俺は土方（あの人）たちについて行かせてもらおうわ…最後まで』

『あいつら戦力でも何でもなし。ただの…あたしの家族さ』

『また休みを頂いた時は、ご一緒にハメ外させてくださいね』

『私…みんなの所に…帰りたい…』

『左目と引き替えに僕は強さを手に入れた』

『外道にしか絶てぬ外道というものがある』

『ならば背負ってもらおうかの。ここに居る皆を。貴様の母親、4
9人』

『裏切り者は裏切りによって消える』

『ロリコンじゃない。フェミニストです』

『晋助様を襲撃するとは、絶対許せないッス!!』

『情弱な侍は、この国から消えるがいい』

『おいでよ。君も笑うといい』

『人を動かすのは武力でも思想でものーて利益じゃ』

『お前を斬るのは骨がいりそうだ。まっぴら御免こうむる』

『白夜叉じゃなく、テメーの声を聞かせろ坂田銀時!!!!!!』

『殺させない！！俺の家族は殺させない！！』

『お前はただ…1人だっただけだろう』

いろんな仲間がいたから、今俺はここにいます。先生がいたから、その仲間がいる。

「…ありがとう」

銀時は懷から、御猪口と小さな酒瓶を取り出して高杉の墓石の前に置いた。

「テメーとの、最初で最後の酒だ」

「あ、お帰りなさい、銀さん…あれ？」

夕方になって帰って来た銀時を見て、新八は首を傾げる。

「銀さん。顔が少し火照ってませんか？」

すると銀時は一言呟いた。

「夕日のせいだ、
バカヤロー」

E
N
D

第19章 人って暖かい（後書き）

愛華蝶 「よーし皆！これから万事屋で打ち上げ会じゃー！！」

全員 「オー！」

打ち上げ会（前書き）

愛華蝶「本当にグダグダな文章にお付き合いありがとうございます！
た。今回は敵も味方も関係ナシの打ち上げ会です！」

打ち上げ会

愛華蝶 「白夜叉再臨篇」記憶無き鬼」完結を祝して!!」

全員 「かんぱーい!!!!」

愛華蝶 「いやー皆さん今回は本当にお疲れさまでした!」

銀時 「いやホントに疲れたよ。まさか俺と高杉が最終対決をして高杉が死んじまうなんてな」

来島 「貴様ああ!! 晋助様のかたき!!」

高杉 「俺がどうかしたか?」

神楽 「うわああああ!! 高杉の幽霊アルウウウ!!」

新八 「違うよ神楽ちゃん。高杉さんは白夜叉再臨篇では死んだことになってるけど、実際には死んでないから」

万斉 「晋助は絶対に死ななくてござるよ」

前原 「絶対ではないだろ。生き物はいつかは死ぬものだ」

銀時 「おー、いち。お前も来てたのか。お、ツラと優羅も」

桂 「ツラじゃない、桂だ」

優羅 「タダ飯食いに来たぞ!」

愛華蝶「ところで皆！今回の白夜又再臨篇はどうだった？」

全員「ビミョー」

愛華蝶「何で全員一致！？そんなにダメだった？」

銀時「何かヅラが中心的な所がムカつく」

愛華蝶「仕方ないでしょ！？他にマトモな人いないじゃん！それとも何？新八にあの名ゼリフ言わせればよかった？」

神楽「あゝそれはイヤアルな」

新八「ちよっ！！という事だソレ！」

（言い合いを始める）

愛華蝶「ま、あの2人は置いといて。次回作どうしようかな？」

銀時「テキトーに日常篇とかでもしとけば？」

桂「それではいつもの銀魂とさして変わらんだろう」

アレン「じゃあ次回作は銀魂×Dグレで作品を書いてみたらどうですか？」

愛華蝶「うわっ！もやし！」

アレン「もやしじゃありません！D・Gray-manのアレン・

ウォーカーです！」

神田「よく分かってるじゃねーか、この作者」

アレン「ソレどういう意味ですか？バ神田」

神田「何だと白髪頭！」

アレン／銀時「何だと！？」

ラビ「みんなは今日も仲良しさ」

リボーン「いや、次回作は銀魂×リボーンでいくぞ」

愛華蝶「家庭教師ヒットマンリボーンまで出て来た！」

獄寺「流石ですリボーンさん！10代目の出番です！」

ツナ「い、いやいいよ（汗）」

山本「何か面白そうだな」

土方「いや、次回作は真選組が主役だ」

沖田「今回全然出番なしでしたからねィ」

愛華蝶「んなことないだろ！？大体自分真選組より攘夷派だから、真選組は動かしづらいんだよ！真選組は山崎とミツバさん以外は興味ない！」

土方／沖田「なっ…!!（ガーン）」

銀時「ププツ！ジミーに負けてやんの」

土方「黙っとけ!!」

愛華蝶「じゃあ思い切って、攘夷戦争篇か、オリジナルキャラの過去に迫る篇とか」

優羅「あ!!オリキャラ篇面白そうだな!」

前原「過去かあ…あまり掘り返されたくはないな」

愛華蝶「テメエに拒否権はない!何故ならお前は私が作ったキャラだからな!」

前原「…（シュン）」

優羅「うわあ!いちがいじけた!」

桂「よしよし」

愛華蝶「でも他に書くのないし…」

アレン「Dグレで行きましょう!」

獄寺「いや、リボーンだ!」

愛華蝶「あーもうっさい!!黙れ!!」

(シーン…)

愛華蝶 「次回作は自分でじっくり考える！」

全員 「えー！」

来島 「晋助様が出るのなら何でもかまいませんッス！」

高杉 「…あんまり動きたくない」

愛華蝶 「動けや」

万斉 「前原殿。是非とも我が鬼兵隊に…」

前原 「うるせー。そのヘッドホンとサングラス叩き壊すぞ」

愛華蝶 (…もう収集がつかなくなってきた…)

銀時 「おい。そろそろ占めたらどうだ？」

愛華蝶 「そうだね。んじゃ、みんな集合！…最後はきちっと占めるよ！」

(ワラワラ…)

愛華蝶 「じゃあいくよー！…白夜叉再臨篇…記憶無き鬼…を最後まで読んでいただき、」

全員 「ありがとうございました！…！！」

愛華蝶「次回作もどうぞよろしくお願いいたします！」

銀時「じゃー行きますかー！…スリー、ツー、ワン…」

全員「ピース!!」

END

打ち上げ会（後書き）

銀魂×Dグレは本当に書いてみたいですね。前向きに考えてます。
よし！Dグレでもオリキャラ出してみよう！最後まで読んでいただきありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4739u/>

白夜叉再臨篇～記憶無き鬼～

2011年10月9日09時46分発行